ある。更にこの目的は、教育にのみ止めることなく、これが社会的生活の福祉と繁栄に寄与すべきことを主張するのである。

かくの如き教育目的実現の為に、タゴールはいくつかの方法論を掲げる内に、先ず教育の場所、つまり環境を第一に強調し、この環境の内、最も重要な要素を雰囲気であるとする。宗教的雰囲気は、無限なるものへの信仰をかりたて、その姿を感ぜしめるものであるというのである。そして彼は、天地自然の中にその場を求め、教室という牢獄の如きものから教育を解放せんとする。そこでは、「目に見えない憧れの雰囲気によって」、無限なるものとの親密な交感を得られるからである。そういう環境に於ける教師と生徒の結びつきは、生命と愛をきずなとした調和にあり、生活の愛を通して共に学ぶものとなるべきであるとする。知識も生活の愛を通して集められなければならないこと、特に生きる宗教は、教えの課業の形では授与されるべきでもなく、又決った時間に授けられる様な断片的なものでなく、生活の絶え間ない実現の段階を繰り返して得られていく様な努力が自然に為さるべきことを教育の方法とするのである。

更に又、タゴールは理想的教師像を述べる中、「職業としてではなく、生活の一部として生徒の学課の手助けをする」教師を描き、教師の教育活動はそれ自身宗教的生活であるべきことを強調するのである。即ち、教師の魂の成長に伴って生徒の魂を成長せしめる様な、人間愛と真理愛に満ちた教師こそ彼の教育に求められるものである。

以上タゴールの教育は、宗教の世界を志向し、教育することは宗教することであり、人間完成の宗教理念を教育に一致せしめている。つまり、タゴールに於ける教育は、宗教の生きた姿なのである。

宗教と教育

浅井円道

「宗教と教育」の問題について私は以前にある新聞に書いたことはあるが、実のところ全くの門外漢である。そこで関係文献を探したところ、戦前戦後を通じてその研究書の豊富さに今さらながら驚嘆した次第。机上の域においてはもはやすべて論じ尽されていると言っても過言ではあるまい。

(一) 考察の分野

宗教と教育という問題について考えるべき範囲について凡その見当をつけてみると、①「宗教と教育との関係」。宗教という社会現象と教育という社会科学の一分野とはいかなる相互関係において併存しているか、つまり宗教と科学、宗教と道徳、宗教と政治との関係が論ぜられるように、宗教と教育との関係の仕方についても考えてみることが、この命題解決の先決問題である。

②「宗教々育」。教育の中には歴史教育、語学教育、数学教育等種々の単元がある。その単元の一つに宗教々育を加えて、宗教々育の場所、機会あるいは方法について具体的に考えてみねばならぬ。

ところが一口に宗教々育といっても、その範囲は極めて広い。その広さを適当に整理すると凡そ次の如し。

宗教々育の対象	場所
僧侶教育	特定の宗教大学、寺院
信者教育	既存の信仰を一層深めるための教育で、寺院説教など
民衆教育	未信の人々の教育 ㋑寺院（僧侶が行う）㋺家庭（両親等が行う）㋩学校（教師が行う）

以上のうち、こゝでは学校教育の面について考えてみよう（特に義務教育）

㋑　学校教育に関する法規

一般に戦後の日本人は第二次世界大戦時の神道教育にこりて、学校は宗教々育をしてはならぬと自戒し、あるいは誤解しているようであるが、新憲法第二十条、教育基本法第九条によれば、官公立学校は「特定の宗教のための宗教々育」を施してはならぬが、宗教々育そのものは寧ろ奨励している。

では特定の宗教にかたよらぬ宗教々育とは何か。これは昭和二十一年八月十八日の衆院本会議における文部大臣田中耕太郎の演説に明かで、氏はこれを「宗教的情操教育」と表現し、智育に対する徳育という重要な任務を負うべきものと規定した。また昭和二十三年七月に教育刷新委員会が時の総理大臣に提出した建議案では「宗教心に基く敬虔な情操の涵養は平和的・文化的な民主国家の建設に欠くことのできない精神的基礎の一つであり、ことに人間性の重要な一面たる宗教的欲求を正しく啓培することは教育本来の使命にも添うことになる」と宗教々育の重要性を強調した。

つまり一宗一派に偏しない宗教々育とは宗教的情操教育の意味であり、また人間性の重要な一面たる宗教的欲求、すなわち人間である以上はだれでもが持っているはずの宗教的本能、それは一条一派に偏向する以前のものであるから、これを啓発し培養してゆこうという訳である。

しかし人間本来の宗教的欲求とは一体どんなものか、この類が明確に把握されぬ限り、いかに宗教的情操の涵養の必要性が叫ばれようとも所詮は空理空論にすぎぬ。けだし日本の場合、宗教的情操とはかくの如きものだと明示することは困難である。たとえば欧米のごとくキリスト教一本で統一されているなら、まだ宗教的情操とは何かに答えることは可能である。しかし日本の場合は神道あるキリスト教あの新興宗教ありで、実々種々雑多なものが混在している。

ゆえに、ある宗教々育反対論者は「一宗一派に偏しない宗教的情操の涵養は、いうべくして行ないえない。校庭に樹木は植えてもよいが、檜とか杓とか桜とかの具体的な木を植えてはならぬと

いうのと同じである」という。一応もっともな議論である。

こゝに至って、われわれはハタとゆきづまらざるを得ない。宗教専門家ですら宗教的情操とは何かに対して明快な指示を与えられる人はまれであるのに、まして学校の現場の先生に宗教的情操とは何かについて確固たる信念をもって当る人は稀有であろう。したがって生徒を導くにも導きようがないというものである。そこで、この宗教的情操教育について、私はだいたい三つの答えを用意した。

㈢　宗教的情操教育

①宗教々育に利用できる単元。角度をかえてそれでは一宗一派の宗教と教材として宗教的真理を教えることのできる機会はないかという方向に目を転ずれば、この問題は簡単に処理できる。この角度から言えば宗教的情操を全身にみなぎらせた人に各宗の祖師がある。これにふれる学科に歴史がある。また寺院教会の見学は社会科でやれる。等々、宗教的情操を養う機会は多すぎる程現存の教育の場にころがっている。しかし、これらの機会を通して宗教的情操を生徒に与えるためには、現場の学科担当の教員がいかに宗教を把握しているかということにかかってくる。ゆえに宗教家は現場の教員と啓発すべく留意することが緊密である。

②純粋宗教の立場で……。次に既成の教団の教義は一宗一派に偏しているが、それら教団の祖師の宗教まで遡ればそこに純粋宗教的要案を見出すことが必ず出来る。その純粋宗教を宗教情操教育に盛りこめばよいのではないかということである。但しその純粋宗教なるものを祖師のどこで掴むか。たとえばわれわれは日蓮教団に所属しているが、祖師日蓮まで遡ってそこに見出すべき純粋宗教とは何かということを考えると、これもまた問題かと思う。そこで私は次のような提言をしたい。

「日蓮聖人はこういわれた」「日蓮宗ではこういう」「法華経にはこうある」「仏陀はこう教えられた」といったのでは一宗一派に偏することになるから、仏陀の教えだけ、法華経の精神だけ、日蓮聖人の精神だけを与えて、誰の教えであるかを言わなければ、それは一宗一派に偏しない宗教精神として通用するのではないか。この際は南無妙法蓮華経を唱えよということも言えない。

人はそのような布教は日蓮聖人の宗教の広宣流布にはならないではないかというかも知れない。しかし現代という場には一教団の利害関係も全く離れた、純粋宗教を要求するむきもあることを我々は認識する必要があるのではなかろうか。そして日蓮聖人の名を弘めなくとも、日蓮聖人の法を弘めれば、日蓮聖人も必ずや喜ばれるのではなかろうか。

③私立学校の宗教々育（略）

㈣　結語宗教々育の重要さに醒めよ

①我々宗教家はたとえ自坊の発展、日蓮宗の教団の発展に直接関係なくとも、積極的に日本人全体の宗教心の向上に骨折ることを惜しんではならない。

②私立学校は自己の持つ責任の重大さに醒めて、事情の許すかぎり宗教々育に貢献せねばならない。

宗門保育の信条を求めて

三田村　龍全

一、宗教保育の意義について
A幼稚園及び小学校の意見の比較検討
B教育基本法に於ける「宗教々育」の解釈
二、仏教保育の意義について
三、日蓮宗保育をどう考えるか
1、日蓮聖人救世の御精神
a　社会的積極性
○慈悲忍難
○心を仏道に専らにして常に慈悲を行ず―（化城品）
○日蓮は…難を忍び慈悲すぐれたる事はおそれをもいだきぬべし
○日蓮は去る建長五年四月二十八日より今年弘安三年十二月に至るまで二十八年の間、又他事なく只南無妙法蓮華経の五字七字を日本国の一切衆生の口に入れんとはげむ計りなり。此れ即ち母が赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり。
b　人間尊重＝生命尊重
○有情第一の財は命に過ぎず。（主君耳入抄）
○我れ深く汝等を敬うて敢て軽慢せず・所以はいかん　汝等皆菩薩の道を通じて常に作仏することを得べし（不軽品）
c　平和と幸福
○汝早く信仰の寸心を改めて速かに実乗の一善に帰せよ。然らば即ち三界は皆仏国なり…身は是れ安全にして心は是れ禅定ならん（立正安国論）
2、法華経の人間像
人間像とは人間の現実的諸相に即して修練を経て到達すべき人間の在るべき像（すがた）をえがける理念である。法華経は人間を仏陀にまで高める道を開いた教えであり、この経の中に描かれる人間の現実相はみじめであるが、そこからその目標とする人間を探ることは、法華経の人間像を見出すことである。……教育的なねらいでその要点を抽出するにとゞめる。
a　より高く正しくあろうとするものは常に対立と懐疑の道を歩む。（法華経展開の構造）
b　人間は常に絶対者に護られんことを潜在的に求めている。（仏所護念）
c　人間は善悪固定したものでなく、常に善き行為に喜びを持つ。（徳本を植える）